

琉球大学病院リハビリテーション科（部） 山田尚基先生

琉球大学での教授就任と沖縄の第一印象について

「2025年1月、琉球大学病院は宜野湾市へ移転し、県内初の高度救命救急センターが新設されました。着任する1カ月前ですが、その節目に出遅れ過ぎずに参加できたことは光栄であり、大きな使命感を抱いております。現在、医師4名、理学療法士21名、作業療法士9名、言語聴覚士4名の体制であり、このチームで団結して新たな挑戦へ向けた気運を高めています。沖縄には個人的な縁が多少あり、結婚式は宮古島で挙げハネムーンも沖縄で、私の名前『尚基』と父の名前『真和』は琉球王朝の尚真王を連想させ、この地との不思議なつながりを感じるこの頃です。温暖な気候や人々の穏やかさに触れる中で、沖縄での挑戦は運命的であり、ここから始まる新たな歩みに胸を躍らせています。」

リハビリテーション科医のキャリアの礎になっているもの

「私のキャリアの基盤は、大学の大先輩で恩師の安保雅博先生、角田亘先生から学んだ研究と臨床の両立の姿勢にあります。具体的には、鳥取県・清水病院で、脳卒中後の機能回復をテーマに、経頭蓋磁気刺激（TMS）とリハビリテーション治療の併用療法が神経可塑性に与える影響を、脳機能画像解析を通じて検証しました。若手時代に画像解析と臨床研究を融合させた経験は、現在の臨床においても大きな土台となっています。その後もTMS療法、ボツリヌス療法、薬物療法の比較研究など、日常診療に直結するエビデンスを積み重ねてまいりました。また、京都大学iPS細胞研究所では多国籍の研究者と再生医療を学び、基礎研究の視点を養えたことも大きな財産です。これらの経験を糧に、今後は『機能回復を最大化する個別化リハビリテーション治療』を追究し、同時に人材育成にも力を注いでいきたいと考えております。」

教育や人材育成に関するビジョン

「大学での講義も担当しており、急性期に始まり生活期から人生全体へのリハビリテーション医学・医療の重要性を学生たちに教えています。たくさんの学生が出席しており、私の話に目を輝かせて聞いてくれる学生も多く、『琉球からリハビリテーション科医を志す人材を育てたい』という思いを強めています。また、琉球大学病院を基幹施設とする専門研修プログラムも強化中で、県内外から優秀な人材が集まる体制を整えています。」

今後、琉球大学で取り組みたいこと

「私が掲げる大きなテーマは『沖縄県民の健康寿命の延伸』です。かつて長寿県として知られた沖縄ですが、近年は健康寿命と平均寿命の低下が課題となっています。その背景にある運動不足や肥満、骨粗鬆症を予防するため、科学的根拠に基づいた県民向け体操を開発し、



山田尚基（やまだ・なおき）特命教授

2025年2月より琉球大学病院リハビリテーション科（部）特命教授に就任。東京都出身。東京慈恵会医科大学卒業後、同大学リハビリテーション医学講座にて研鑽を積む。東京通信病院、東京慈恵会医科大学附属柏・第三病院などで診療経験を重ね、臨床・研究・教育の分野で幅広く活躍。京都大学iPS細胞研究所で再生医療の研究に2年間従事。2024年に東京慈恵会医科大学リハビリテーション医学講座准教授就任。ボツリヌス療法、経頭蓋骨磁気刺激療法、再生医療臨床応用、オンラインリハビリテーション医療提供システムの開発・普及などに力を注いでいる。

地域への普及活動を進めます。

琉球大学病院は県内唯一の特定機能病院で、観光立県ならではの国際医療ニーズにも直面しています。外国人患者の増加に対応するため、多言語翻訳ソフトを各自の端末に導入し、国際医療の受け入れ体制を整えています。これらの取り組みは将来の留学生受け入れといった国際連携や教育発展の基盤になると確信しております。

また、地域との協働では、宜野湾市やプロバスケットボールチーム『琉球ゴールデンキングス』とのメディカルパートナーシップを強化し、選手支援に加え、スポーツ活動を通じた住民の健康増進につなげていきます。人気チームとの連携を活かし、市民講座やイベントを通じて『動ける高齢者』を増やし、県民全体の健康づくりに寄与したいと考えています。

【置かれた場所で咲きなさい】という言葉のとおり、ここ琉球の地に臨床・研究・教育の土壌を形成し、努力して種を蒔き、多くの様々な南国の花を咲かせ、その花びらが日本、そして世界へと広がる未来を描いております。最後に、このようなご縁をいただきましたすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。」

（文責 広報委員会）